



SFC Open Research Forum 2004 特別対論

## 熊坂×井庭 「0番目の対論」

SFC OPEN RESEARCH FORUM 2004 &gt;&gt;&gt;

今年のSFC Open Research Forum 2004は、「21世紀をつくる対論12」をテーマに、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの論客が、21世紀が抱える12の世界の問題を提起し、争点を明確にし、それを乗り越えるための政策論を展開する。

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスは11月23、24日、都内で研究機関としての成果を一般に公開する「SFC Open Research Forum 2004」を開催する。「21世紀をつくる対論12」をテーマに掲げ、メインセッションでは、同キャンパスの論客が、21世紀の世界が抱える12の問題を提起し、争点を明確にし、それを乗り越えるための政策論を展開する。今年の実行委員長を務める環境情報学部長の熊坂賢次氏は、「未来への思いを実現する実験的で挑戦的な試み」と話す。Open Research Forumを前に、総合政策学部専任講師の井庭崇氏と対論してもらった。



Open Research Forumの対論12に先駆け、熊坂氏（左）と井庭氏が「0番目」の対論を行

熊坂 「SFC Open Research Forum」の今年のテーマは「21世紀をつくる対論12」です。ここで言っている12の対論というのは、21世紀をひっくりかえしただけなのですが、SFC（慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス）の3学部1研究科の人たちでいろいろな形でバトルをしたいと考えたわけです。

僕は団塊の世代なのですが、2012年には65歳になります。単純に高齢社会になるから、今の社会システムでは悲劇しか起こらないと思います。

でもよく考えてみると、本来長寿は究極の幸せであるのに、みんな高齢化を恐れています。つまり、20世紀の近代社会のシステムが二進も三進も（にっちもさっちも）いかなくなっているわけです。みんなが長寿を望ましいものと思えるには、高齢者が少なくて若い人がたくさんいるという前提のもとでしか成り立たない近代社会のシステムをどう変えるかということ、考えたいわけです。

そのとき、テクノロジーが社会を変えていく鍵になると思うのです。

## 技術と環境は共存すべき

しかし、環境は、過去の歴史をみると、テクノロジーが優れてくればくほど、ボロボロにされてきました。テクノロジーが皆無だった時代、環境は無限と考えられていたのに、どんどん有限になっています。しかし、テクノロジーと環境が対立関係になるのもおかしな話です。やはりテクノロジーがわれわれの世界を幸せにするためのツールだとすれば、環境を疲弊させるようではだめで、共存を考えないといけません。

また、社会のシステムをつくってきた、いわゆる資本主義体制とか、市場メカニズム、デモクラシー、あるいはマスメディアや文化の問題な

ども含めて、明らかに限界がきていると思います。そこで、それをどうぶち壊すか、そのための対論を組みたいと考えたわけです。



SFC Open Research Forum 2004実行委員長を務める熊坂賢次 環境情報学部長

井庭 今回の対論では、分野が全く違う人がひとつのテーマで話すというのがおもしろいですね。例えば、村井純さんと坂茂さんの話は、「アーキテクチャ」という言葉でいきなりぶつかります。坂さんが「アーキテクチャを建築以外の人が使ってもらるのは非常に迷惑している」と言い、村井さんは「アーキテクチャというのは象徴的な構造、仕組みをつくっていくというところで、僕らは僕らなりに何かの社会の基盤をつくっているんだ」という自負があるようです。とにかく全く聞いたことがないような話が出てきて、非常におもしろそうです。

SFC発足時にはテクノロジーの話がこんなふう絡んでくるとは思っていませんでした。やはり1993、4年ぐらいからWorld-Wide Webが登場し、そして今やユビキタスが話題となっています。社会の仕組みを考えるうえで、ネットワークは欠かせなくなってきました。



総合政策学部専任講師の井庭崇氏

## テクノロジーで総合政策が生きてくる

熊坂 総合政策は環境情報とセットになって、また現場での看護医療もあって初めて生きてきます。他大学にも総合政策学部がたくさんつくられたけど、ほかは双子、あるいは三つ子の学部にはなっていません。単純な総合政策学部だと、既存の経済学や政治学などが寄り集まったものでしかありません。そうではなくSFCのようにテクノロジー（環境情報）が一本横に入ってくると生きてくるわけです。今や、遺伝子分野で富田勝さんが活躍し、デジタルによって地球環境を把握しようという福井弘道さんのデジタルアースプロジェクトもあります。本当に遺伝子から地球環境まで情報のテクノロジーで全部見てしまおうという挑戦が始まっています。

井庭 社会科学とか政策科学にしても、社会に技術が影響を及ぼすことを考えると、その技術をどうつくるかを考えている人たちが、一緒にその政策とか社会について考えるというのが重要です。そこがポイントだと思うのです。

熊坂 絶対にそうです。さっきの村井さんと坂さんのアーキテクチャをめぐる戦いのようなことから新しい何かを生み出すことが重要です。政策はこっちにいて、環境、医学テクノロジー系はあっちというのでは全然だめ。まさに同じ場で、というのがSFCの良さだと思います。まだまだ不満ですけど（笑）。

井庭 SFC Open Research Forum 2004の対論でそこが大きく進歩するのかなと思います。

熊坂 その意味では遅すぎました。しかし、このくらいの時期がたたないと、融合というのは起こらないという気がします。僕はもう完全にテクノロジー音痴の社会学者のパターンです。でも自分自身はわからないけど、自分でやりたい思いを突き通すためにはテクノロジーが不可欠だと信じ、学生にサポートしてもらいながら全く違う新しいものをつくってきたという実感があります。だから総合政策の人も、当然新しいテクノロジーを前提として社会をどう見るかということをしなくてはなりません。SFCならそれができます。

井庭 今の話の逆で、僕は環境情報学部出身でテクノロジー系ですが、現在は総合政策学部にも所属しています。コンピュータシミュレーションで社会の仕組みをどう変えられるか、理解するかをやっています。こういうことがどんどん起きてくるとおもしろいと思います。

熊坂 あなたたちのようなSFCの遺伝子をもった若手がスタッフとして入ってくることによって、その辺は一挙に膨らんでくると思います。1999年のSFC Open Research Forumで、金子郁容さんが「インターネットは遅れてきたテクノロジーだ」と言いました。その言葉がとても印象に残っています。

かつて社会を変革するにはふたつの方法がありました。ひとつはテクノロジー、もうひとつはイデオロギーとか宗教という「思い」の世界です。今は新しいテクノロジーで社会を動かさざるを得ない状況ですが、それに呼応するような「思い」も必要です。

金子さんも僕も学生運動の世代ですが、そのときにもインターネットがあったならば、僕たちはもう少し真面目に社会変革に貢献できたかもしれませぬ。やはり「思い」をどういう形でつくるかがいま求められているような気がします。

### 「忘れる」仕組みが重要

井庭 僕は最近、「忘れる」ということの重要性を感じています。例えば、ソーシャル・ネットワーキング・サービスなどもつながるとそのままになってしまいます。自然には切れない仕組みになってしまっています。高度経済成長やバブルの記憶が忘れられないと、高齢社会が悲観的になってしまいますから、忘れる仕組みをどうやって社会の中に取り入れていくかが重要だと思います。

熊坂 花束は永遠にはもたないし、お菓子も食べれば消えてしまいます。しかし、写真なんかを送られると、「いらないよ、これ」と思っても、捨てられなくて困ります。

井庭 捨てられませんね(笑)。

熊坂 テクノロジーで溜めるほうは進んだけれど、賞味期限がくると消える、削除される、ということが、もっとスリムな社会を考えたときに必要です。

のは紙だと言われていて、100年以上も保存できます。しかし、コンピュータテクノロジーの場合は、10年たつとメディアが読めなくなってしまう。しかし、これは物理的に読めないから忘れざるを得ないといった強引な形だと思います。

「忘れる」というのは、「なくなる」ととは微妙に違います。物理的になくなれば、ふとどこかで思い出したりすることもできなくなります。その解明にはたぶん脳の仕組みなどが参考になると思います。

### 信頼の再構築が次の社会システムを

熊坂 情報が無限に入ってくるようになればなるほど、選択や消去の仕組みをどれだけダイナミックに取り入れていくかということが重要なテーマになります。

また、最近では「トレーサビリティ」が重視され始めています。信頼がなくなったことによって、僕たちは何でもトレースしなければならないという状況に陥っています。信頼というものが明らかに社会のシステムとして失われてしまいました。僕たちはそれを再構築しない限り、次の社会のシステムをつくることはできません。

井庭 ピアツーピアではありませんが、だれが権威だとか、あの人が信頼できると言ったから、ではなく、お互いにあの人は信頼できるというネットワークがカギになってきます。

熊坂 これまでのシステムというのは、非常に階層的で、権威をもって信頼を裏付けていました。しかし、ネットワークにはそれがありません。

ネットワーク社会は、そのシステムとしての信頼をどう築き上げるかが難しいのです。ソーシャル・ネットワーキング・サービスではありませんが、「友だちの友だちは友だち」というと、ネットワークではもうわかりませぬ。

にもかかわらずそういうものだったら信頼できる、というところにもっていかない限り、ネットワーク社会は築けないと思います。

井庭 トレーサビリティにしても人に頼ると、監視社会みたいになってきてしまいます。

### 個人をもう一度考え直す

熊坂 そう、監視社会は絶対望まないわけで、難しいですね。でも、SFCのようなところでは、ICカードに個人の情報を入れて、新しいコミュニケーションや社会システムの実験をしようとしています。これまでのようにプライベートとパブリックな世界の明確な境界線を引かなくなったらどうなるのか。そういう状況を前提に、個人をもう一度考え直さなければいけないような気がします。

井庭 SFC Open Research Forum 2004は、メインのパネリストがSFCの第2世代で、コーディネーターが第3世代です。第1世代の人たちは、SFCをつくろうという問題意識がありました。第2世代は実際にいろいろな壁を壊してきた世代で、第3世代はその壁が壊れた中で育ってきた世代です。既存の学問というものがない、方法論に対してオープンでいたい、いろんな分野のやり方を混ぜていきたいと考えたりします。1960年代、70年代に出てきたソフトウェア工学は、大規模で複雑なソフト

トウェアをたくさんの人たちでどうつくっていくかを考えます。僕は、これは情報システムだけでなく、社会システムなどにも応用できないかと考えたりします。そうすると意外と役に立つものがごろごろしています。しかも、ソフトウェアの場合は開発サイクルが短く、いろんな方法論が試されます。僕は、そこで成果を上げたものをほかの分野にも移転するというをやっています。こ

れからは、いろんなやり方をミックスしながらやっていくということが重要になってくると思います。

SFCの過去の10年は非常に分りやすい時代で、インターネットが始まり、大きなハッピー・クエストがあってみんなで取り組んできました。このOpen Research Forumからまた新たに始まっていくのでしょ

熊坂 本当にそう思います。どんな問題が浮き彫りになるか期待しましょう。

(編集部：この対論は「三田評論」2004年11月号を再編集し掲載したものです)

**ITmedia**

本文は「ITmedia (<http://www.ITmedia.co.jp/>)」において2004年11月に掲載された記事を再編集したものです。

本文を事前の承諾なしに、私的利用の範囲を超えて転載、複製、出版、放送、公衆送信する等その方法の如何を問わず禁止します。